

「地域共生のいえ」を通じて見えた居場所の可能性

－地域に住まいをひらくということ－

一般財団法人世田谷トラストまちづくり 地域共生まちづくり課

眞鍋 沙織、山田 翔太

(居場所 交流 制度の狭間)

1. 目的

「地域共生のいえ」とは、区内の建物オーナーが自宅や建物の一部をひらいて地域交流の場とする取り組みのことをいい、世田谷トラストまちづくりが開設支援や運営支援を行っている。オーナーの地域への想いが反映されているため、活動内容が多岐に渡っており、特別養護老人ホームの入所者の憩いの場、介護者の交流の場、子ども食堂等がある。その中で今回は2007年に「地域共生のいえ」として開設された「岡さんのいえTOMO」を取り上げ、これまでの活動を振り返り、見えてきた「地域共生のいえ」の持つ可能性について紹介したい。



2. 実践内容

「岡さんのいえTOMO」のこれまでの代表的な活動について次のとおりまとめた。

- (1) まちの保健室カフェ：地域包括支援センターの看護師による介護予防・健康相談教室
- (2) 開いているデー：未就学児と母親たちが集う等、地域内外の日常的な交流の場
- (3) たからばこ（世田谷区受託事業）：大学生が中心となり開催されている中高生のための居場所
- (4) 岡's キッチン（世田谷区受託事業）：児童養護施設退所者を対象とした料理教室・居場所
- (5) 駄菓子屋の開催：地域の子どもやその両親向けに玄関先で駄菓子販売
- (6) 地域との連携：地元の小学校へ講師（囲碁・工作・英語）や地域行事への参加
- (7) 大学や自治体との連携：大学等へ講義の開催、調査・研究の受け入れ
- (8) その他（場所貸し）：小さな教室やワーキングスペース等、団体や個人への場所貸し

3. 結果

築70年である「岡さんのいえTOMO」は、自宅をひらいて地域のために貢献したいという強い思いが詰まっており、建物や雰囲気から発せられる温かさやぬくもりは、訪れる者に対し祖父母の家に来たような大きな安心感を与える。こうした特徴を生かしながら、変化する時代のニーズに対し柔軟に対応してきたことが、上記の活動内容を見ても分かるだろう。

ここで大きく取り上げたいのは、既存の公的サービスからこぼれおちてしまう「制度の狭間」



にあるような人々も訪れる点である。どうしたらよいか分からず、とにかく不安で悩んでいるという声。こうした生の声に耳を傾け、必要に応じ地域包括支援センターや社会福祉協議会等へと繋いでおり、「地域共生のいえ」は、地域住民の重要な受け皿の一部として機能しているといえる。

4. 考察と今後の課題

当初の主たる目的は、地域住民の交流であった「地域共生のいえ」が、時代とともに新たな側面を持ち活動している。コロナの影響により、これまで表出していなかった地域課題が一気にあぶりだされている昨今において、これからますます地域の受け皿としての役割を求められるだろう。今後は、それにどのように応じていくかが課題となり得る。私たち世田谷トラストまちづくりは、コロナ禍で人が集まるのが困難な状況の中、こうした地域課題を対処するオーナーに、必要な情報を収集し共有する等、寄り添い伴走支援することで、地域福祉の充実に貢献していきたい。



「岡さんのいえ TOMO (入口部分)」



「地域共生のいえ かわら版 (広報紙)」

<助言者コメント>

杉原 たまえ (東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授)

ご報告者である一般財団法人世田谷トラストまちづくり地域共生まちづくり課は、「市民緑地・小さな森」「空き家等地域貢献活用」「トラまちの駐車場事業」「図書公刊」など、住民目線でまちづくりにあったらいいな!と思うような多彩なまちづくり支援事業に取り組まれています。なかでも本報告でご紹介いただいた「地域共生のいえづくり支援制度」は2005年に始まり、2019年度には都市住宅学会会長賞を受賞するなど、着実に活動を展開されてきました。

今回は「地域共生のいえ」21事例の中から、住み開きの元祖と称される「岡さんのいえ TOMO」の事例をご紹介いただきました。ご報告を拝見し私も訪問してみたくなり、「岡さんのいえ TOMO」のホームページを開いてみました。どれも、心がほっこりするような、多様な活動が掲載されています (<https://www.okasannoie.com/>)。本報告では、「岡さんのいえ TOMO」が当初の【多様な人々が集う場】から、【制度の狭間にある人々たちを受け止める場】へと、役割が拡張されてきたことが指摘されています。コロナ禍にあって行政機関には届きにくい、しかしながら確実に大きくなりつつある人々の声なき多様な苦しみに、「岡さんのいえ TOMO」が寄り添い続けることの重要性を強調されていますが、それはまた、地域共生のいえづくり伴奏者としての本報告者の姿勢そのものであると思います。また、報告の形式からすれば、「1. 目的」→「2. 実践内容」→「3. 結果」と進むところを、本報告では「結果」のタイトルに「経過」という言葉が添えられています。いえには終わりや定型はなく、地域の人々とともに成長し変化していくものであることの意味が込められているようで、こうした伴走者のあり方こそ、寄り添い見守り育てる姿勢だと感銘を受けました。